

明治期の東洋英和女学校における英語教育

English Language Teaching at Toyo-Eiwa Jogakko in the Meiji Era

舟 木 てるみ

Terumi Funaki

0. はじめに

1868年の明治維新を迎えると、社会全体が変わるとともに、教育制度も大きく変わった。1872年に最初の近代的な教育法制となる太政官布告が発布され、性別の差別なしにすべての者に教育を受けることを勧奨された。これをきっかけに、さまざまな目的・理念を掲げた女子のための教育機関が現れ、キリスト教各派によるキリスト教主義女学校も相次いで設立された。これらキリスト教主義女学校での英語教育は、宣教師が母国語を媒介しない、音声を重視した Direct Method が用いられた。彼らが用いたこの英語教授法は、これ以降の日本の英語教育に多大な影響を与えることとなった。

明治期の英語教育研究では、村松（1997）や池田（1998）が挙げられるが、キリスト教主義女学校での英語教育を対象とした研究はまだ十分とはいえない。本稿では、1884年にカナダ・メソジスト派の婦人伝道会社が設立した東洋英和女学校をとりあげて、婦人宣教師による英語教育がどのように進められていたのか明らかにしていきたい。

1. キリスト教主義女学校の設立

日本開国後、アメリカにあるプロテスタント各派の伝道会社、つづいてイギリスとカナダにある伝道会社が相次いで宣教師を派遣した¹。開国後しばらくはキリシタン禁制が解かれておらず、布教などは許されていなかった。そこで来日した宣教師らは日本語の研究に着手し、日本人から日本語を教わるかたわら英語を教えた²。

明治初年に来日したアメリカの宣教師は、女子の社会的地位の低さや束縛された状況に驚き、女子に対する教育を緊急の課題として取り上げた³。同様に、日本を見聞した Bousquet も日本の女子教育について「女子教育にあつては、すべてこれからである。女子がうける児童教育は不十分である」⁴と述べている。

来日した女性の宣教師達も、当時の日本女性の置かれていた社会的地位の低さだけでなく、教育の機会が与えられず無教養な状況を目の当たりにして、教育を通じてこれらを改善しなければならぬことを痛感した。当時、アジアでの女性への伝道活動には女性の宣教師が不可欠だと認識されていた。女性の社会に男性は軽々と近づけないため、女性に接することができるのは女性だけだったからである。女性や子どもに対するキリスト教の布教は、教育を通すことが有効な手段であるとして、日本に婦人宣教師を派遣し、日本に学校を設立しようとした⁵。1871年以後、宣教師による女子教育は急速に進められていった。表1にあるように公立校数に比較すると明治初期においてキリスト教主義女学校の開校が多いことが明らかである。

表1 明治初期に開校したキリスト教主義女学校と公立校数（1870～1893年）

時期	キリスト教系女学校	官公立系女学校	
		官立	公立
1873	4	1	1
1878	13	0	2
1883	19	1	6
1893	48	1	7

出典：秋枝（1963）p.56 一部加工

キリスト教主義女学校が相次いで設立される中で、カナダ・メソジスト教会も女学校の設立に向けて動き出した。1873年に来日して日本宣教をスタートさせたカナダ・メソジスト教会の Dr. Macdonald と Dr. Cochrane は、アジアにおける女性への宣教は女性だけにできうものと理解し、婦人宣教師の派遣を要請した。その要請をうけ、カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社 (The Woman's Missionary Society of the Methodist Church of Canada、以下 WMS) から Miss Cartmell が宣教師として派遣されることになった。

Cartmell は 1882 年 12 月に日本に到着し、まずは東京で日本語を勉強しながら、Mission Church の Sunday School や女性の集まり、病人の訪問、通訳を通して英語を教えた。日本で伝道活動をするうちに Cartmell は、日本の少女達は人格や自由を軽視され、学校教育を受けられないを知り、キリストの福音にもとづく女子教育を行うことこそが自分の使命であると強く考えるようになった。学校を設立して生徒を集め、教育と信仰指導を充実することにより、生徒だけでなく、その父母にもキリスト教徒の接点と道が開かれると確信した⁶。WMS 本部の協力を得て、1884年に東洋英和女学校 (Toyo Eiwa Jogakko, Oriental English-Japanese Girls' School) を麻布鳥居坂に開校した。

櫛田 (2009) も指摘しているように、ミッション系の女学校は、物的にも人的にも、それぞれの所属する外国の伝道会社の教会ミッションの経費によって賄われていた。また、教育方針も、その教派の方針に沿うものであった⁷。東洋英和女学校においても、その設立・運営にかかわる費用の大部分は WMS が賄った⁸。宣教師による英語教育を中心とした西欧文化の教育がなされ、当時の社会的な欧化現象の影響を受けたこともあり、女学生に人気が高く、1886年には定員 170 名に対して 250 名の生徒を擁するほどだった⁹。

2. 外国語学習の変遷

1808年のフェートン号の長崎入港事件をきっかけとして、江戸幕府は翌1809年、長崎のオランダ通詞6名に英語を学習するようにと命じた。これが日本における最初の英語学習といわれている。幕府は、開国に伴う外交・貿易

の必要に迫られ、1855年洋学所を設立し、1856年にはそれを蕃書調所と改称した。この蕃書調所英語が教授課目として採り上げられた。これが、欧米語の翻訳と学習を専門とする、幕府最初の外国語学校となった。ここでの英語の授業法は、蘭学塾や漢学塾と同じように会読・訳読方式であった¹⁰。

この蘭学学習法は、漢文の教授法・学習法（漢文訓読法）の影響を受けている。江戸中期以降、漢文の学習は、入門期には素読し、次は会読するという方法であった。この素読から会読へのやり方は、やがて漢学から蘭学へと踏襲され、医学など学問をするのに必要な読解力を養成する蘭学学習法を確立した。一方で、長崎出島のオランダ商館員とコミュニケーションするのに必要な会話力や作文力を養成する実用オランダ語教授法も確立された¹¹。

明治期の英語教育はこの蘭学学習法とオランダ語教授法の影響を強く受けた。日本人が英語を教える場合の多くは、この漢学から蘭学へと踏襲されたやり方にもとづいて、発音には注意しないで、もっぱらこの読解を中心とし、内容の理解・把握に重点をおいた。これを変則英語という。一方、外国人教師や宣教師が日本人に英語を教える場合は、発音会話と反復練習を重視する授業法がとられた。これを正則英語とよんだ。私塾・私立校の授業法は変則、官立校・ミッション校は正則というのが一般的であった¹²。

政府は、お雇い外国人の雇用と留学生の海外派遣によって西欧文化を積極的に取り入れようとした。それにともなって英語の学習熱が高まった。福沢諭吉は、万国共通の英語を貿易通語と呼び、英語を先進国に追いつくための重要な道具と位置付け、まず学ぶべきは英語であると説いた。しかし、次第に西洋文化への熱狂は冷め、自国語や自国文化の伝統的価値を軽視してきたことに対する反動が始まる。明治政府は、1889年2月大日本帝国憲法を發布し、1890年1月帝国議会を発足させ、近代国家のシステムを整えた。日清戦争（1894-95年）、日露戦争（1904-05年）に勝利したことでナショナリズムが台頭すると同時に、言語ナショナリズムも台頭し、英語への反発が見え始めた。大学や高等学校からお雇い外国人教授の大半が去り、教授用語が英語から日本語に代わり、正則英語から変則英語へと転換したことは、その後の英語教育や学習に大きな影響を与えた¹³。

3. キリスト教主義女学校での英語教育

キリシタン禁制の高札の撤廃以前に来日した宣教師達の究極の目的は、キリスト教の伝道であった。英語教育を通して宣教の途を開くことが、やりうる最善の宣教事業であった。まずは日本語を研究する一方で、機会を最大限に活かして積極的に日本人に英語教育を行った¹⁴。

田邊（2015）によると、ミッション系では Direct Method（直接教授法）による音声指導が宣教師によって広められた¹⁵。宣教師が用いた Direct Method に共通する基本理念は次の諸点である¹⁶。

1. 外国語の教授は母国語を媒介とせず、その外国語のみを用いて行う。
2. 文字や文法の習得よりも音声を優先させる。
3. 実物、絵、動作などによって、外国語と意味を直接連合させる。
4. 文法は帰納的方法で規則を導き出すようにする。

この基本的な理念のもとに宣教師による英語教授の一般的な順序は、スペリング・ブックを用いてアルファベットの読み方・書き方の練習を行い、実物や絵などを見せながら単語を教え、簡単な単語・単文、とくに日常の実用的な英文を繰り返し学習し、暗唱させる。この一連の口頭作業によって、個々の単語の発音はもとより、一文を通してのストレス、イントネーションを含めた厳格な発音訓練をした。正確な発音が修得できると読本と英文法を授け、ある程度の学力に達した者には英作文が課された。文法規則は各英文に系統的に組み入れられており、英文に習熟することによって帰納的に教授されるように工夫されていた¹⁷。宣教師による英語教授法は、①英語に接する時間の多さ、②すべて英語による少人数授業、③発音指導の徹底、④実物や絵などによる単語の習得、⑤実用的な英文の反復音読、⑥文法は読書材料からの帰納的指導、とまとめることができる。

3-1. 東洋英和女学校における英語科目

WMS の宣教師によって設立された東洋英和女学校における英語教育はどのようなものであったか。

表 3 明治女学校と東洋英和女学校の学科学期課程と時数の比較

学校名		東洋英和女学校					明治女学校				
科目	学年	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
	英語		5	8	10	10	9	4	4	4	4
和漢文		5	5	5	5	5	4	4	4	4	4
地理・歴史		2	2				1	1	2	1	1
動物・植物・鉱物				3	4						6
生物・科学・物理				4	3				6		
数学・算術		4	3	2	2	2	4	4	4	4	4
図画		2	1								
習字		3	2								
家政経済						3					
裁縫		2	2	2	2	2					
生理						4					
唱歌		2	2	2	2	2					
修身		3	3	2	2	2	1	1	1	1	1
	計	28	28	30	30	29	14	14	15	20	19

出典：櫛田（2009）p.72、p.99 をもとに著者作成

英語の時数を公立学校と比較するとどうか。1901 年高等女学校令規則と中学校令施行規則にみられる英語の標準時間は表 4 の通りである。高等女学校令施行規則では甲号の修業年限は 4 年、丙号の修業年限は 5 年、外国語は随意科目とすることが可能で、いずれにおいても標準時間は 3 であった。

表 4 1901 年高等女学校令・中学校令施行規則にみられる英語の標準時間

年	東洋英和女学校						高等女学校				中学校	
	1899		1917				1901 (甲号)		1901 (丙号)		1901	
年齢	学科	学年	英語時数	学科	学年	英語時数	学年	外国語時数	学年	外国語時数	学年	外国語時数
12	予科	3	7	本科	1	12	1	3	1	3	1	7
13		4	7		2	11	2	3	2	3	2	7
14	本科	1	8		3	12	3	3	3	3	3	7
15		2	8		4	12	4	3	4	3	4	7
16		補充科	1		8	5	12			5	3	5

出典：矢口（2008）pp.61-62 を参考に著者作成

同じ 1901 年の東洋英和女学校の英語時数を示す正確な資料がないが、1899 年と 1917 年の時数と比較しても、高等女学校の 2 倍、中学校と同等の時数を確保していたことは明らかである。

② すべて英語による少人数授業

英語の授業時間数が多いこともさることながら、日本学以外の科目も英語で教授された様子を卒業生が書き残している。

先ず驚いたのは、歌は讃美歌の他は全部英語、体操さえ西洋の先生が英語の号令で教えられたことだ。(東洋英和女学院東光会 (1984) p.33)

英学の授業は全部英語でしました。地理は外国地理で、「ボストンについて書け」というような問題にも英語で答えました。歴史は英国史でした。両科目とも丸暗記させられました。(東洋英和女学院東光会 (1984) p.29)

1914 年高等科を卒業し、翻訳家としても知られている村岡花子も、英語に接する時間の多さを語っている。

わたし達は、英語でさまざまな学科の勉強をした。世界地理、世界歴史、修辭学、比較宗教学、まず私の時代にはこのくらいの学問であったが、それ以前の人たちは幾何、代数までも英語で学んだそうである。その他に普通の英語の読み方、書取り、作文、会話すべて英語の学習と常識にいいならされていることは全部した。だから本当に英学は忙しかった。(東洋英和女学院 (1984) p.269)

さらに、一クラスの人数は 20 人程度という少人数で授業が行われていた。東洋英和女学院 (1965) によると、生徒達の一日は、朝 8 時 10 分から 20 分間 Cartmell の司会による礼拝があり、その後牧師による聖書講義や宣教師の英語で教える教理問答を暗誦する時間があった。午前の授業は邦楽 (日本学) といって、日本語で作文・読方・数学・漢文・習字の授業が行われ、11 時 30 分から

12時までは英語の讚美歌や聖書講義があり、午後になると洋学（英学）で、英語による授業が行われた。

③ 発音指導の徹底

英語科目はどのような内容で進められたのか。英語に関わる教授の要旨が1884年の設置願に詳細に書かれている²¹。それによると、英文学（英学）の科目は、「読方、書取、会話、文法修辭、作文、習字」である。割り当てられた時数は表5の通りである。

表5 東洋英和女学校学科学期課程（1884年）

科目		学年				
		1	2	3	4	5
英文学	読書	2.5	2.5	2.5	3	3
	書取	2.5	2.5	2.5	(春)2(秋)0	
	会話		2.5	2.5	3	3
	文法修辭			2.5	3	3
	作文		0.5			
習字		3	2			

出典：櫛田（2009）p.99

まずは習字本を用いてアルファベットを書く練習をする「習字」と並行して、行われたのが「読書」と「書取」である。「読書（のちに読方と名称変更）」とは、声に出して英文を読むことで、生徒の発音を正し、つかえることなく英文を読み下すことができ、文の意味を明瞭に理解できるようにする内容である。「書取」は、教員が口述する単語や文章などを書き取る内容である。

教授の要旨の中で最初に挙げられている科目の読書（読方）は、「教員生徒ノ発音ヲ正シ」²²とあり、繰り返し発音させ、暗誦をさせることで、正しい発音を身につくようにすることを重視していた。また正しい発音を身につけると同時に、正しい発音を聞き取ることも重視しているため、書取は読書と同じ時数を割り当てていたと考えられる。

④ 実物や絵などによる単語の習得

1909年の尋常小学校に相当する小学科では、第5学年になると英語が科目に登場する。備考に英語は「発音及び聞取方練習のために単に会話のみを教授する」とある。

表6 小学科 教科課程表（1909年）

科目 \ 学年	学年						計
	1	2	3	4	5	6	
国語	8	8	6	6	6	6	40
習字	2	2	3	3	4	4	18
数学	2	3	4	4	4	4	21
理科					2	2	4
歴史					1	2	3
地理					2	1	3
図画	1	1	1	1	1	1	6
裁縫			2	1	2	2	7
手工	1						1
英語					1	1	2
体操	2	2	2	2	2	2	12
唱歌	2	2	2	2	2	2	12
修身	2	2	1	2	2	2	11
計	20	20	21	21	29	29	140

出典：東洋英和女学院（1984）p.193より著者作成

カナダ人教師による授業内容は、玩具の動物や果物などの実物を使うことで単語を覚え、それらをつかって簡単な会話をする、あるいは、教員が口のことばを聞き取った。その様子を小学科の卒業生が以下のように語っている。

小学校の頃は英会話が週一回あり玩具の動物を使って名前を覚えたり、果物や野菜で買い物練習をしたり、簡単な会話を教わりました。これは今でも

役に立っています。女学校になり一年の時は週に一時間発音記号を学び ABC を書くことなく唯耳の勉強でした。これが他の学校にないやり方で素晴らしいやり方だったと思います。(東洋英和女学院東光会 (1984) p.54)

⑤ 実用的な英文の反復音読

東洋英和女学校には「The Sixty Sentences by Blackmore (ブラックモアの 60 の英文)」というものがある。これは第 3 代校長の Blackmore がまとめたもので、寄宿生活の朝から就寝までの行動をごく短い 60 の文章で表したものである²³。英語を習い始めの生徒達にこの文章を必ず暗誦させた。しかもその基本の文を、さらに過去形、未来形、進行形、完了形にと時制を変化させ、あるいは否定文、疑問文、否定疑問文にと自在に変えて答えることが求められた²⁴。卒業生達は、年を経てもすらすらと口をついて出るこの基本文型の暗誦、応用によって語学力が身についたと語る。

東洋英和女学院東光 (1984) や東洋英和女学院 (1965) によると、学校では毎朝礼拝が行われ、修身は聖書講読の時間として、英語で聖書を学びながら聖句を暗誦する時間でもあった。

上級に進むにつれて暗誦せねばならないものがふえて「主の祈り」「詩編二十三篇」「十誡」「使徒信条」等になり日本語と英語の両方で暗誦出来るようにせよとの事でした。(東洋英和女学院東光会 (1984) p.35)

礼拝に聖句の暗誦はつきものでした。毎日曜日に新しい聖句が英文和文で黒板に書き出されますのを暗誦してゆくのです。そして学期末には十幾つかになった聖句を暗誦出来るようになられたのでした。(東洋英和女学院 (1965) p.22)

また、寄宿生活を送った卒業生によると、寄宿生にとっては授業外でも日々宣教師とともに過ごすので、暗誦できるようになった聖句を繰り返し生活の中で使った。

毎朝礼拝があり、ミス・カートメルが司会され、その後牧師の聖書講義や宣教師方の英語で教える教理問答を暗誦する時間があった。毎朝礼拝を守る事は今も昔も変わらないが、午後には英語の讚美歌や聖書講義があり、夜は寄宿生と、学校内の使用人全員がカートメル先生の部屋に集まって礼拝を護り聖書の勉強をした。(東洋英和女学院 (1965) p.66-67)

⑥ 読書材料からの帰納的指導

キリスト教主義学校で用いられた英語の教授法の大きな特徴は、正確な発音が修得できたあとに英文法を授けることである。文法は英文に習熟することによって帰納的に教授された。ここでいう帰納法とは、いくつかの具体例から、違いや共通点を比較して、共通する規則を見つける方法で、英語に囲まれて生活をしている人が文法を習得するにはこの帰納法が適切な方法とされている。

開講科目が確認できる 1884、1891、1899、1917 年の英語科目をまとめたのが表 7 である。

表 7 英語の開講科目別一覧 (1884-1917 年)

年級	1884							1891							1899							1917							
	年	学	科	数	字	取	文	年	学	科	数	字	取	文	年	学	科	数	字	取	文	年	学	科	数	字	取	文	
小	1	8	●	●	●	●		1	1	●	●	●	●		1	1	●	●	●	●		小	1	1	●	●	●	●	
小	2	10	●	●	●	●		2	2	●	●	●	●		2	2	●	●	●	●		小	2	1	●	●	●	●	
小	3	10	●	●	●	●		3	3	●	●	●	●		3	3	●	●	●	●		小	3	1	●	●	●	●	
小	4	10	●	●	●	●		4	4	●	●	●	●		4	4	●	●	●	●		小	4	1	●	●	●	●	
小	5	9	●	●	●	●		5	5	●	●	●	●		5	5	●	●	●	●		小	5	1	●	●	●	●	
中								1	1	●	●	●	●		1	1	●	●	●	●		中	1	1	●	●	●	●	
中								2	2	●	●	●	●		2	2	●	●	●	●		中	2	1	●	●	●	●	
中								3	3	●	●	●	●		3	3	●	●	●	●		中	3	1	●	●	●	●	
中								4	4	●	●	●	●		4	4	●	●	●	●		中	4	1	●	●	●	●	
中								5	5	●	●	●	●		5	5	●	●	●	●		中	5	1	●	●	●	●	
高															高	1	8					高	1	8				●	●
高															高	2	8					高	2	8				●	●
高															高	3	8					高	3	8				●	●

出典：東洋英和女学院 (1984) より著者作成

どの年のカリキュラムにおいても、初年度から文法を教授しておらず、習字、読方、会話、読解、文法という順序で進んでいく。1884 年の設置願によると文法は、「文法修辞ハ英語ノ分類法則ヲ教ヘ又文例ヲ与ヘテ分解シ誤文ヲ示シテ之ヲ矯正セシメ漸次進歩スルニ及ビ英文ノ構造法ヲ授ケ高尚ナル英文ヲ弁解シ又之ヲ作ラシムルニ便ナラシム」²⁵ とある。文例を与えて分解して、規則をみつ

けていく、誤りのある文には何が誤りなのかを指摘し矯正することで文の構造や規則を教えていったのである。

表 8 の 1917 年本科の時間割をみると、書取のかわりに、会話、読方、読解の時数が増えているが、文法は第 3 学年からスタートすることになっている。

表 8 本科の時間割 (1917 年)

科目	時間 (分)	学年					計	時間数
		1	2	3	4	5		
文法	35			2	2	2	6	210
作文	35				2	2	4	140
会話	35	4	3	4	2	3	16	560
読方	35	3	3	3	2	3	14	490
読解	35	3	3	3	3	2	14	490
書取	35				1		1	35
英習	35	2	2				4	140
計		42	42	42	44	44	214	8225

出典：東洋英和女学院 (1984) p.182 より著者作成

初習時は、文法を教授項目として独立して取り出して、文法用語を使って教えるのではなく、沢山の用例を与えたり、教師と生徒間のコミュニケーションする中で、英語のルールを帰納的に理解させていった。

⑦ 成績評価

生徒たちの成績評価点は 100 点満点で行われ、各科目は 50 点以上が及第であったが、学年の総平均点が 60 点以上でないと及第できない規定であった。座席はその成績順に決められていた²⁶。英語科目の授業は大変に厳しくて落第が相つぎ、上級生であっても下級生と一緒にあって英語を勉強した様子が東洋英和女学院 (1984) に見られる。

英語はいつも外人の先生で、厳しいので大てい一年の時に全クラスでも二十人位でしたが、その中 1/3 位の方が英語だけ落第させられました。それでも別になんとも思わないような風習でございました。(中略) 毎朝全校生が講堂に集まって礼拝がありました。(中略) 成績の席順に並ばされており、教室に出て行く時一人一人行進するので、誰が一番か二番かピリか、みんなに分かるような仕組みになっておりました。教室でも成績の順にきめられておりました。(東洋英和女学院 (1984) pp.190-191)

授業中や学年末、卒業式においても全員の前で成績が読み上げられたことも東洋英和女学院東光会 (1965) に詳細に書かれている。

H 先生のリーディングの時でしたが、組中の生徒一人々々によませ終へると一々点数を読み上げたものでした。例へばタマエ、ミヤオカ 95、フサ、オザワ 70 など。学年末の成績発表は変わったものでした。其日を「点よみ」といひまして全校生徒は講堂に集められていつも宮里先生 (習字と作法の先生) が赤罫紙に書かれた点数の帳面から一人々々の総点平均点席次を読みあげるばかりか、及第は勿論落第までも一々よみあげられたものですから、此点読後は喜ぶもの泣きくづれるもの交響樂を湧きかへらせたものでした。(東洋英和女学院 (1965) p.22)

3-2. 東洋英和女学校におけるその他の活動

1909 年の文部省の英語教授法調査委員会の報告書には新教授法の基本として 8 つの原則をあげており、その中で、「Realien、即ち外国の生活・風俗・制度・地理・歴史・文学などを広く教うべきこと」²⁷ とある。言語を習得するには、単語や文法を覚えるだけでなく、その言語が用いられている国や地域の歴史、文化、思想なども知る必要があるからだ。

1899 年のカリキュラムの備考には「寄宿生徒には年齢に応じ教師の下に次の数件を実習せしむ。日常礼節・洋服繕方・麵包製法」²⁸ とある。寮生活ではすべて洋式で、つねに洋服を着用し、食事は 1 日 1 回宣教師と同席で洋食をとる。

寄宿舎内ではベッドを使用して、外国の風俗を教えられた。肉親への恩を忘れないために週に一度は必ず家庭に便りを書かせたり、言行は勿論、清掃洗濯に至るまで厳格な躰を与えられたことは東洋英和女学院（1984）および東洋英和女学院（1965）に散見される。

私達の居りました寄宿舎は、十畳敷位の洋室二間で（中略）服装、起臥、食事等すべて洋式でした。朝夕の食事は、いつも西洋の先生方と御一緒で、その時は、一切日本語を用いることを禁ぜられ、随分窮屈なこともありました。（中略）午餐のみは、他の生徒方とともに和食を摂りました。いろいろ有益な事柄を教えて戴きましたが、中にも客間の掃除、接客法、洗濯の仕方、洋服の下着の作り方などは、後来大層役立ちました。（中略）洗濯当番があり、大きな金盥を火にかけ、洗濯物を煮て、つぎに四斗樽を七、八本並べてすすぎ洗いし、夕方にはアイロンをかけて生徒達にくぼるのでした。お掃除も中々きびしく、不潔な部屋の前には赤旗が立つので、皆一生懸命にきれいにしたものでした。（東洋英和女学院（1984）p.41）

所謂箸の上げおろしにも、細かい注意を与えられました為、月一回、七八人づつ洋式テーブルで洋式食事をいただき、又時には宣教師達のテーブルに、一人二人づつ呼ばれて、テーブルマナーを教えて戴きました。（東洋英和女学院（1965）pp.148-149）

外国の風俗だけでなく、外人教師自ら生徒を引率して政治演説を聞きに出かけたり、孤児救済等の社会事業にも関心を持たせたりするなど、生徒にさまざまなことに興味を持たせる姿勢が見受けられる。

只今で申します社会科の勉強にも中々熱心で、外人教師がすすんで生徒を連れて、政治演説を聴きに参りましたり、日曜日にはミセス・ラージ、其の他の教師に連れられて、生徒十人位づつ、慈恵病院の施療室を慰問したり致しました。ミセス・ラージは、孤児救済にも中々御熱心で、私共も色々とお手伝いさせて頂きました。（東洋英和女学院（1965）pp.148-149）

学校内や寄宿舎内でも、年に数回、文学会が開かれ、英詩の暗唱や余興的な英語対話などを披露したり、英文学に関する活動写真や世界的な音楽などの機会があれば校長自ら引率して鑑賞させるなど、さまざまな経験をさせた。

年二三回の小文学会と一回の大文学会とが催されたものでしたが、小文学会は寄宿のみのものでした。其頃の呼物としては幼稚科生の愛らしい遊戯、唱歌をはじめ英詩の暗唱、英文、和文の文章朗読や英語の歌などで、余興的のものとしては英語対話や活人画が盛んでありました（中略）一方活動写真が漸く流行するに至りました時、それが英文学に関するものであつたら校長自ら、生徒を引率して鑑賞させて下さいました。或は世界的な音楽家の来聴される場合には横浜まででも帰途が夜の十二時過ぎにならうとも伴つていつは音楽についての知識を広めるやう導いてくださつたのでした。（東洋英和女学院東光（1984）pp.22-23）

3-3. 教員としての婦人宣教師

学校を運営してきた婦人宣教師たちの教師としての質はどの程度であったか。伊勢（2012）によると、東洋英和女学校の初代校長の Cartmell をはじめ、全宣教師が1870年代後半から1930年初頃までにカナダの教員養成の師範学校を卒業している²⁹。

彼女たちが学んだ州立師範学校でのカリキュラムには、普通公立小学校やグラマー・スクールの教科（読み方・書き方・文法・作文・図画・代数・幾何・三角法・歴史・図画・初歩論理・初歩科学など）すべてを取り入れていた。また、教育課程は教科内容の知的勉強と実践・実用的教育実習とから成り立っている、教授法としては *object-teaching* を採用し、抽象的な言葉だけの講義によるのではなく、具体的な物を用いて、経験的に学ばせることを強調していることは彼女たちが日本で実践した教育の基盤であった³⁰。Gagan（1992）によると、Cartmell は理科で生徒たちにノミを見るために顕微鏡や必要な書籍をカナダから取り寄せたりして、経験的に学ばせようとした。また、三十分の授業のために、三時間の準備をした³¹。

婦人宣教師たちは、母国において当時の平均的な女性よりも高い教育を受けていた。しかし教育を受けたとしても、教師以外にめばしい職業がなく、結婚するまでの一時期、教師として働くことはかろうじて当時の社会で理解を得られた。当時の結婚年齢は 22 歳前後で、婚期を逸した女性にとって非常に生き難い時代で、宣教師として海外で活躍した女性の多くが、この年齢層の女性たちであった。そのため彼女たちは宣教師としての人生を全うする強い意志をもって現地に赴いたのである³²。

さらに、宣教師として海外に派遣されるためには、WMS 宣教師に選抜される必要があった。その選抜にはガイドラインがあり、(1) 年齢は 22～30 歳³³、(2) 独身であること、(3) 資格や経験（教員、看護師、医者など）を有し、(3) 徳性は成熟した、賢明で、粘り強い、献身的な女性であること、(4) 霊的責任や信仰は本人と牧師の証言が必要、(5) 語学力、財政・行政手腕、適正能力、健康・体調等も評価された。また、選抜された後には Methodist Training School で宣教師としての新人教育や健康診断を受けた³⁴。WMS は、教員としての資格だけではなく、語学力を備え、粘り強い性格の女性を求めていたのである。

メソジスト派の宣教師の生活・文化の特色は、非常に厳格な倫理的戒律と質素、儉約があげられるとしている。万事につけ地味で、控え目で、堅実な人たちであった。そして現実的で倫理的に厳しく、信仰を生活の中で生かした。日曜日に娯楽をしたり、映画館へ行くことを好まず、トランプ、宝くじなどの賭け事を一切禁じ、万事につけ禁欲的であった³⁵。このメソジスト派宣教師の厳しさは、東洋英和女学校の授業や寄宿舎といった至る所で見られた。「授業休憩の時間を問わず規律をみだる者はすべて罰則を適用された。之は名門の子女といえども何等区別する所がなかつた」³⁶と規律を乱す者には厳格な処罰が与えられた。また寄宿生は「第一、第三金曜日に限って外出を許されたが、午後五時までに帰らなければ、その次の外出を禁ぜられた」³⁷のであった。

ただ、宣教師は厳しさだけでなく、生徒に対して愛情をもって接していたことも年史に散見される。

お小言が多かつたかなりきびしい教育法であつたやうに思はれますが、厳格な教育者の驍方として当然な事なのでありましたでせう。又一方考へてみますと其頃の先生方殊に宣教師方の献身的努力と身を以てする人格的教化は、深刻に教へ子達の人格養成に力あるものであつたと思はれます。(東洋英和女学院 (1965) p.24)

西洋の先生方は生徒に対して万事に行届き、時には寧ろ過ぎる位でした。霜焼で靴の穿けない時、小使に湯を沸かせ、オリーブ油を塗って下さったことなど今も記憶しております。(東洋英和女学院 (1984) p.41)

とくに寄宿生たちは、宣教師との温かい人間的な触れあいの中で、信頼を寄せていったことが東洋英和女学院 (1965) に見られる。

外国の先生と、私達生徒の間は至って緊密で、殊に寄宿舎では生徒はドア一つ隔てて教師の部屋と隣り合つて居りましたりして、互の交渉は多いものでありました。教師は生徒に対し極めて親切でありました。

顔色の悪い生徒を見いだしてはすぐに衛生室につれて行つて手当をし、深夜病床に生徒を見舞つては徹宵看護に當つた外人教師の真情は、不言の裡に大きな愛の教訓を与えた。(東洋英和女学院 (1965) p.10)

4. まとめと課題

東洋英和女学校の英語教育は、英語科目の時数だけでなく、英語以外の科目や礼拝や聖書の時間なども英語で行われていたので、英語を使う機会が多かつた。カナダの師範学校で学び、教員としての経験をもつ宣教師が、日本語を介在させることなく、英語で直接的に口頭練習に注力し、発音指導を徹底し、実用的な英文の反復音読することで、リスニング、スピーキング能力の熟成をはかつた。また語彙の習得は、実物・絵・動作などによって常に直示的に指導し、学習言語材料については英語のテキストだけでなく聖書を活用した。明治時代の官公立系女学校の英語教育内容に比べると顕著な差が見られた。

当初 Cartmell の構想した女学校は単なるデイ・スクールであったが、伝道会社は、終日にわたって生徒にキリスト教的感化と訓育を行うことのできる、寄宿舎設備をそなえたボーディング・スクールとすべきであるとの意見を彼女に伝えた³⁸。伝道会社の意向に沿う形で1884年2名の寄宿生でスタートした。生徒はなるべく寄宿舎に入るように奨励されたこともあり、在籍した生徒の大半は寄宿生であった³⁹。そのため常に宣教師に接してその指導啓発をうけることができた。言語を習得するには文化や歴史、思想なども知らなければならぬとして、授業の中でだけでなく、外国の風俗を学ばせ、宣教師自ら生徒を引率して政治演説を聞きに出かけたり、孤児救済等の社会事業にも参加させるなどした。

元来、メソジスト派の特色でもある質素で堅実、そして現実的で倫理的に厳しさを備えていた婦人宣教師ではあったが、厳しさの中にも生徒への愛情を惜しみなく注いだ。

ヴィクトリア女王が、王室の者でも何時独り立ちせねばならぬ時代が来るかもわからぬとて、王子王女方にそれぞれ特技を身につける様教育された事に、先生は深く感服され、生徒達に万一の場合を考えて、何か身につく勉強をしておく様すすめられました。其の頃の女学校教育としては、進歩的な考え方だったと思います。(東洋英和女学院 (1965) pp.148-149)

東洋英和女学校での婦人宣教師たちは、使命感をもって、生徒たちが将来に身につく勉強、すなわち信仰を土台として、幅広い教養と実用的な英語を教授し、Bousquet をして「女子がうける児童教育は不十分」といわしめた近代女子教育の歴史の中で、女子教育を推進する一役を担った。そして、教育者をはじめ、社会事業、婦人解放運動に携わる者を多数輩出し、「信仰の念厚き日本的淑女を養成」したことがカナダ婦人宣教師たちの功績といえよう。

今後の課題は、国弘 (2015) が指摘している、直接法の問題についてである。日本語という媒介語を使用せず学習項目を理解させるためには、既習事項を利用して未習事項を説明する必要に迫られるため、授業全体のカリキュラム作成

や、授業ごとの教案作成が難しいという教える側の問題と、母語を使用しないため、不安に感じたり、語句の理解に手間取り、意味の誤認が生じるという学習者側の問題にどのように対処したのか。また、どのようなテキストを使用していたのか。さらにキリスト教主義女学校にとって試練であった戦前・戦中期に、カリキュラムがどのように変化していったのかという点も今後の課題である。

注

- 1 東京都(1961、p.12) 1859年に監督派(American Episcopal Mission)が宣教師を派遣し、長老派(American Presbyterian Mission)、オランダ改革派(Dutch Reformed Church Mission)がそれに続いた。
- 2 東京都(1961、p.12)によると、これが英学の導入のきっかけとなったばかりでなく、近代的教育の先駆となり、日本でもっとも古い女子教育施設にはここに源を発しているものが多い。
- 3 東京都(1961) pp.8-10
- 4 ブスケ(1977、p.396)「女子教育にあつては、すべてこれからである。女子がうける児童教育は不十分である。この教育は理解力を鍛えずして、これを狭めている。判断力を育て、個性と責任感を強め、迷信に代えるに倫理的および宗教的教義をもってし、また隷従に代えるに義務愛をもってしなければならない。そして、女子が夫の仕事に関心をもち得るようにしなければならない。これが家庭・結婚における親密さ・本当の夫婦の結びつきを作る唯一の手段である」
- 5 確井(1969) p.36
- 6 東洋英和女学院百年史(1984、p.18)によると、カートメルは、日本のような異教的社会でのキリスト教伝道には教育事業がきわめて重要であることを悟った。そこで、キリスト教の集会に一度でも出席した子供特に女子に、継続してキリスト教的影響を与えるためには、婦人宣教師の監督のもとに、日本人クリスチャン教師を雇い入れて、一つの学校を開くことが必要であると考えた。そのような学校ができれば、日本人教師に生徒の家庭を訪問させて、生徒の継続的出席をすすめることができ、それと同時に、生徒の父母と接触して父母たちをも教会に近づけることが可能となるであろうと考えた。また、婦人宣教師の良き協力者となりうる日本人キリスト教徒の働き手を養成することも重要な課題とした。
- 7 平沢(1996、p.63)によると、欧化主義時代のキリスト教主義学校は3類型に分類できる。(1)外国ミッションが経営し、校長ならびに幹部には宣教師が主としてこれにあたり、教科内容は一般に程度が高く、英語を重視する、純粋なミッション・スクール、(2)日本人または日本人がほとんど同格の地位をもって経営にあたり、校長ないし幹事職も日本人(または必要に応じて外国人)が就任し、校風もミッション・スクールほど外国化していない、(3)日本の教育を十分に顧慮し、

教派を超越して清新なキリスト教的精神のもとに自由の気を忘れない教育を施そうとする。東洋英和女学校は (1)、明治女学校は (2) に分類される。

- 8 WMS の会則第 3 条 Membership によると、Life-members は 25 ドル、Members of Auxiliaries は 1 ドルを献金額と定めている。WMS の年次報告書によると、WMS 設立初年度は、Life-members 34 名、Members of Auxiliaries 854 名からの献金とその他の献金を含めて 2916.78 ドルで、カナダ国内宣教の費用に充てられた。しかし 2 年目以降は Japan Work と名付けられた東洋英和女学校の運営 (校舎建設・維持費、給料等) に WMS の収入の約 3 割が充てられた。これはカナダ国内宣教に対する伝道の費用を上回る金額であった。
- 9 東京都 (1961) p.95、p.101
キリスト教主義女学校では、聖書を中心とした宗教教育、外国文学、洋楽器演奏 (ピアノ、ヴァイオリンなど)、西洋料理や裁縫、作法、ダンス等、斬新な教育が行われた。明治初期の文明開化志向の中で、キリスト教主義女学校の女学校は、欧化志向の上流階層の人気をアツめ、一定数の女子生徒を集めていた。(齊藤 2014、p.141) しかし一方で「西欧かぶれ」という批判もあった。(稲垣 2007、p.166)
- 10 清水 (2010) p.6
- 11 清水 (2010) pp.3-4 「素読」とは、意味を考えずに字だけを追い、声を出して読むこと、「会読」とは、複数人が 1 か所に集まり、ある者が漢籍の内容を論じ、他の者が質問をする、という質疑応答の共同学習のこと。
- 12 清水 (2010) p.7 なお、「変則・正則」は、本来開成学校のカリキュラムの名称で、語学を正則、講読を変則といったことに由来し、それがやがて授業法の違いを意味するようになった。
- 13 清水 (2010) pp.6-8
- 14 茂住 (1989) pp.316-317
- 15 田邊 (2015) p.34 Direct Method を宣教師が用いた一方で、ほとんどの私塾・学校では、日本人教師が漢学・蘭学の手法を踏襲した変則式教授法で教え、発音は軽視された。
- 16 田崎 (2000) p.17
- 17 茂住 (1989) pp.316-317
- 18 表 2 は東洋英和女学院 (1984) と東洋英和女学院 (1965) に記載されているデータから作成したものである。1907 年と 1909 年本科については詳細が記載されていないため空欄としている。
- 19 櫛田 (2009、pp.76-77) によると、明治女学校は、外国伝道会社の補助を毛頭も希望せず、自主・自立の精神を貫いて、日本人による日本女性一般のための教育という理念に沿ったクリスチャン・スクールであった。
- 20 カリキュラム全体からみた英語時数の割合では、明治女学校の割合は低いわけではない。同校ともに英語科目の割合は 30%前後である。
- 21 東京都 (1961) pp.87-92
- 22 東京都 (1961) p.89
- 23 東洋英和女学院 (1984) p.259

The Sixty Sentences By Miss Blackmore

- | | |
|--|---------------------------|
| 1. The rising bell rings at six o'clock. | 31. I go to the washroom. |
| 2. I get up at once. | 32. I wash my hands. |
| 3. I take a sponge bath. | 33. I make my hair tidy. |

4. I brush my teeth.
5. I comb my hair.
6. I dress myself neatly.
7. I read my Bible.
8. I say my prayer.
9. I go downstairs.
10. I meet some of my classmate.
11. We greet each other.
12. We go to the playground.
13. We play ball a little while.
14. The breakfast bell rings at seven o'clock.
15. We go to the dining room.
16. We eat our breakfast.
17. I go back to my room.
18. I put my room in order.
19. I get my books ready for school.
20. I go to my classroom.
21. I study a little while.
22. The school bell rings at eight o'clock.
23. We all gather in the Assembly Hall.
24. We have prayers.
25. The principal calls the roll.
26. We divide into our Japanese classes.
27. We begin our Japanese lessons
28. We have a singing lesson at ten o'clock.
29. We continue our Japanese lessons.
30. The noon bell rings at twelve o'clock.
34. The dinner bell rings at ten minutes past twelve.
35. We go to the dining room again.
36. We eat out dinner.
37. I go back to my classroom.
38. School begins again at one o'clock.
39. We have a Bible lesson first.
40. We divide into our English classes.
41. We begin our English lessons.
42. We have conversation at half past one.
43. School is out at three o'clock.
44. Some of the daily pupils go home at once.
45. Some of the girls sweep and dust the classrooms.
46. We have a game of hide and seek.
47. The others play in the yard for an hour.
48. I go to the reading room.
49. I read the newspapers.
50. I write a letter to my home.
51. We have supper at half past five.
52. We have evening prayers after supper.
53. We begin to study at a quarter past six.
54. The little girls go to bed early.
55. The big girls go upstairs at nine o'clock.
56. We get ready for bed.
57. I say my prayers before getting into bed.
58. The last bell rings at half past nine.
59. One of the foreign teachers comes to our rooms to say "Good-night".
60. We all sleep quietly until the rising bell rings again.

24 東洋英和女学院 (1984) p.52

25 東京都 (1961) p.92

26 東洋英和女学院 (1984) p.190

27 伊村 (2003) p.71

28 東洋英和女学院 (1984) p.106

29 カナダの師範学校 (Normal School) はフランスの Ecole Normale に由来し、Ryerson の教育システムに沿って各州に建てられた。師範学校の入学資格は、16 歳以上、道徳的であること、読み・書き・算数に通じていること、卒業後に学校で教える意図を表明することであった。

カナダ婦人宣教師物語編集委員会 (編) によると、初代校長の Cartmell は公立の女学校に学んだ後、教員養成のトロント官立女子師範学校で学業を修めた。その後ハミルトン官立女学校の教師および校長を経て婦人宣教師として来日した。第

- 2 代校長 Eliza Spencer Large はトロント市立高等中学校を卒業後、オンタリオ州立スクルトン校で学び、オンタリオ州の女子中学校や官立学校で教職に就く。1885 年に来日し、家事・英語・唱歌を担当する。第 3 代校長 Isabella Slade Blackmore はツルコ師範学校卒業後来日。第 4 代と第 6 代校長 Munro はオタワ師範学校卒、1888 年来日、聖書・英語・英文学担当する。
- 30 伊勢 (2010) pp.12-13
- 31 カナダ婦人宣教師物語編集委員会 (編) (2010) pp.56-57
- 32 篠田 (2009) pp.139-140
- 33 Gagan (1992) によると、年齢基準では、例外として、専門的訓練・語学の才のある人、キリスト教の仕事のできる人は 30 歳以上も可。日本の場合は、のちに 25 歳以上となる。第一期任務終了前に病気以外で辞任する場合は厳しい罰則があり、一年以内の辞任は帰国費用自己負担となっていた。
- 34 1894 年にトロントで開設された施設で、宣教師になるために必要な新人教育 (志願者教育を含む) や健康診断等を行った。
- 35 カナダ婦人宣教師物語編集委員会 (編) pp.122-123. Dr. Macdonald が語るメソジスト宣教師の特徴は、(1) 芝居、寄席に出入りすべからず、(2) 酒、タバコの類いは無駄で、有害なり。用いるべからず、(3) 主の祈りを朝、夕なすべし、(4) 衣類など派手にすべからず、(5) 己を愛する如く他人を愛すべし、である。
- 36 東洋英和女学院 (1965) p.10
- 37 東洋英和女学院 (1965) p.21
- 38 東洋英和女学院 (1984) p.30
- 39 東洋英和女学院 (1965) p.21 全校生徒が 156 人のところ、寄宿生は 100 名を超えるほどであった。

参考文献

- 秋枝蕭子(1963)「キリスト教系女子教育研究のしおり」『文藝と思想』第 25 号, pp.51-65, 福岡女子大学.
- 池田稔 (1988) 「明治初期女子教育と英語の教授・学習」『日本英語教育史研究』第 3 号, pp.15-29, 日本英語教育史学会.
- 伊勢紀美子 (2009) 「見直されるカナダ婦人宣教師の活動—カナダの文献から」『カナダ・メソジスト教会婦人宣教師が拓いた東洋英和女学院の保育・保育者養成の特性の検証 2008』pp.31-40, 東洋英和女学院大学.
- 伊勢紀美子 (2012) 「カナダの婦人宣教師が受けた教員養成教育—Toronto Normal School 1847-1947 と Inaugural Service, Opening of the Provincial Normal School, Truno から」『カナダ・メソジスト教会婦人宣教師が拓いた東洋英和女学院の保育・保育者養成の特性の検証 II 2009』pp.1-14, 東洋英和女学院大学.
- 稲垣恭子 (2007) 『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社.
- 伊村元道 (2003) 『日本の英語教育 200 年 (英語教育 21 世紀叢書)』大修館書店.
- 確井知鶴子 (1969) 「明治のキリスト教女子教育の定着過程：明治二十年代を中心に」『紀要第 6 号』pp.33-46, 東海学園女子短期大学.
- 大滝晶子 (1972) 「明治期のキリスト教主義女学校に関する一考察」『教育学雑誌』第 6 号, pp.52-70, 日本大学教育学会.
- 開国百年記念文科事業会編 (1980) 『日本文化交渉史 第 3 巻 宗教教育』東洋文庫.

- 片山清一（1984）『近代日本の女子教育』建帛社。
- カナダ婦人宣教師物語編集委員会（編）（2010）『カナダ婦人宣教師物語』東洋英和女学院。
- 基督教学校教育同盟編（1961）『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟。
- 榎田真澄（2009）『男女平等教育阻害の要因 明治期女学校教育の考察』明石書店。
- 倉長魏（1937）『加奈陀メソジスト日本伝道概史』教文館。
- 國弘保明（2015）「語学教育に於ける文法翻訳法と直接法」『日本橋学館大学紀要』第14号, pp.37-45, 日本橋学館大学。
- 国立国会図書館調査及び立法考査局（1950）『明治以降教育文化の統計』国立国会図書館調査立法考査局。
- 小檜山ルイ（1992）『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』東京大学出版会。
- 小山静子（1991）『良妻賢母という規範』勁草書房。
- 斉藤泰雄（2010）「初等義務教育制度の確立と女子の就学奨励」『国際教育協力論集』第13巻第1号, pp.41-55, 広島大学。
- 斉藤泰雄（2014）「教育における男女間格差の解消—日本の経験」『国立教育政策研究所紀要』第143集, pp.137-149, 国立教育政策研究所。
- 佐藤義隆（2002）「日本の外国語学習及び教育の歴史を振り返る—日本の英語学習及び教育目的論再考—」『岐阜女子大学紀要』31, pp.43-52, 岐阜女子大学。
- 志賀匡（1960）『日本女子教育』玉川大学出版。
- 清水稔（2010）「外来文化の受容の歴史から見た日本の外国語学習と教育について」『文学部論集』第94号 pp.1-14, 佛教大学。
- 篠田靖子（2009）「アメリカ女性宣教師の来日とその生活：金城学院を例として」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』12, pp.127-165, 金城学院大学。
- 高野俊（2002）『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流』大月書店。
- 田崎清忠（編）（2000）『現代英語教授法総覧』大修館書店。
- 田邊祐司（2015）「日本英語音声教育史：岩崎民平『英語 発音と綴字』における“教育的まなざし”」『専修人文論集』97号 pp.31-49, 専修大学。
- 手塚竜鷹（1972）「カナダメソジストミッションの教育活動—女子教育を中心として—」『英学史研究』1973巻5号, pp.33-46, 日本英学史学会。
- 東京都（1961）『都史紀要9 東京の女子教育』東京都。
- 東洋英和女学校五十年史編纂委員会編（1934）『東洋英和女学校五十年史』東洋英和女学院。
- 東洋英和女学校七十年誌編纂委員会編（1965）『東洋英和女学校七十年誌』東洋英和女学院。
- 東洋英和女学院百年史編纂実行委員会編（1984）『東洋英和女学院百年史』東洋英和女学院。
- 東洋英和女学院東光会編（1984）『東光 東洋英和女学院創立百周年記念』東洋英和女学院東光会。
- 平沢信康（1996）「近代日本の教育とキリスト教（5）：明治初期・欧化主義の時代におけるキリスト教女子」『学術研究紀要』第15号, pp.49-64, 鹿屋体育大学。
- 深谷昌志（1996）『良妻賢母主義の教育』黎明書房。

- ブスケ, ジョルジュ (著) 野田良之他 (訳) (1977) 『ブスケ日本見聞記 2 —フランス人の見た明治初年の日本』 みすず書房.
- 松村幹男 (1997) 『明治期英語教育研究』 辞游社.
- 茂住実男 (1989) 『洋語教授法史研究—文法・訳読法の成立と展開を通して』 学文社.
- 矢口徹也 (2008) 『女子補導団—日本のガールスカウト前史』 成文堂.
- 渡辺良智 (2008) 「ミッション・スクールの女子教育に関する一考察」『青山學院女子短期大學紀要』 62, pp.141-167, 青山學院女子短期大學.
- Bays, Daniel H (2010) *The Foreign Missionary Enterprise at Home: Explorations in North American Cultural History*, University Alabama Press.
- Gagan, Rosemary Ruth (1992) *A Sensitive Independence: Canadian Methodist Women Missionaries in Canada and Orient, 1881-1925*, McGill-Queen's University Press.
- Platt, H. L. (1909) *The Story of the Years: A History of the Women's Missionary Society of the Methodist from 1881 to 1905. Vol. 2-Canada*, Woman's Missionary Society, Methodist Church.
- Whiteley, Marilyn Färdig (2005) *Canadian Methodist Women, 1766-1925: Marys, Marthas, Mothers in Israel*, Wilfrid Laurier University Press.
- Woman's Missionary Society of the Methodist Church of Canada (1881-1991) *Annual reports of the Woman's Missionary Society of the Methodist Church of Canada*.